

巻頭言 「世田谷」への誘い

研究室の窓からビルの狭間に富士山や箱根の連山が見える。四季折々に移り行く山並の風情や、夕暮れに浮かび上がる富士の姿は都会の中に在っても美しい。山々は人間が世田谷の地に生活の根をおろした頃から、様々な営みをみてきたのであろう。

今年は昭和女子大学創立百周年、近代文化研究所設立五十周年の記念の年である。昨年五月の所員会議で、本学が歴史を刻んできた根幹の地を見つめ直し、衣・食・住・環境・文化・文学・歴史などの様々な研究分野から「世田谷」にアプローチして原稿を執筆し、特集号として『近代文化研究所紀要』を発行することになった。本学の前身日本女子高等学院は大正九年九月に創設されたが、戦災のために全校舎が罹災し、昭和二十年十一月九日に現在の地、世田谷区三宿町の旧陸軍近衛野戦重砲兵第12連隊跡（現、世田谷区太子堂1-7）に移転した。今回載せられた論文の中で、「世田谷」と下肥では一九二〇年代の世田谷が軍から大量の尿尿供給を受けていたことが記される。また、「火野葦平と向井潤吉——従軍がもたらしたもの」では、世田谷に住んだ画家向井潤吉と、『糞尿譚』で第六回芥川賞を受賞した火野葦平の接点が表示された。『榆家の人びと』も世田谷区松原を舞台に戦前から戦後を描く。世田谷の戦後建築、遠藤周作の本学での講演をもとにした考察、俳誌「風花」の同人須田英子の活動など、本学と浅からぬ因縁をもつ「世田谷」の地は多様な面白さを秘めていた。

本号は新型コロナウイルス禍の中で、これまで当たり前と思っていた人と接して行う教育や授業の見直しを迫られ、研究も思うに任せぬ中での作成であった。困難な状況下での執筆ではあったが、「世田谷」のテーマが有する奥の深さを所員が実感し、過去から現在、そして未来へと継承されるべき研究の「視点」を示すことができたように思う。

「世田谷」の来し方行く末に思いを馳せながら、今後も近代文化研究の成果が発信されることを願ってやまない。

（近代文化研究所所長 烏谷 知子）

執筆者紹介（五十音順）

- 烏谷 知子（からすだに ともこ）教授・博士（文学）『上代文学の伝承と表現』おうふう、2016年／「神語から天語歌へ」学苑951、2020年／「天之日矛伝承の考察」学苑939、2019年／「月立ち」考一倭建命と美夜受比売の唱和歌謡について」学苑927、2018年／「宇能能和紀郎子伝承の考察—第四番歌謡・第五番歌謡を中心に—」学苑915、2017年
- 笛木 美佳（ふえき みか）准教授『遠藤周作 挑発する作家』（共著）至文堂、2008年／「遠藤周作と世田谷（一）」学苑947、2019年／「遠藤周作「楽天大将」論—朝吹志乃にうかがえるグレーム・グリーン二作品の影響—」学苑927、2018年／「遠藤周作「深い河」論—グレーム・グリーン「燃えつきた人間」の受容について—」学苑915、2017年／「遠藤周作「深い河」論—「玉ねぎ」に秘められたもの—」遠藤周作研究3、2010年
- 福田 委千代（ふくだ いちよ）准教授『昭和女子大学女性文化研究叢書第九集 女性と家族』（共著）御茶の水書房、2014年／「少女小説の系譜—尾島菊子の「新しい少女少女文学」—」昭和女子大学大学院日本文学紀要30、2019年／「少女小説の系譜—「少女画報」と伊澤みゆき—」学苑851、2011年／「吉屋信子『紅雀』・二人のヒロイン—「少女の友」の少女小説—」学苑797、2007年／「由利聖子『チビ君物語』の世界—「少女の友」の少女小説—」学苑749、2003年
- 福田 淳子（ふくだ じゅんこ）准教授『川端康成をめぐるアダプテーションの展開 小説・映画・オペラ』フィルムアート社、2018年／『川端康成作品論集成 第6巻 「反橋」連作 舞姫』（共著）おうふう、2011年／『川端文学の世界3 その深化』（共著）勉誠出版、1999年／『川端文学の世界4 その背景』（共著）勉誠出版、1999年／「川端康成と小説「眠れる美女」」東京文化会館開館55周年記念・日本ベルギー友好150周年記念 オペラ「眠れる美女〜House of the Sleeping Beauties〜」公式プログラム、2016年
- 堀内 正昭（ほりうち まさあき）教授・博士（工学）『ブックレット 近代文化研究叢書13 世田谷の近代住宅—和洋折衷の多様な展開—』昭和女子大学近代文化研究所、2018年／『旧近衛輜重兵大隊営内射撃場の調査報告ならびに復元的考察』（世田谷区文化財調査報告集26）、世田谷区教育委員会、2018年／『ブックレット 近代文化研究叢書10 初代国会仮議事堂を復元する』昭和女子大学近代文化研究所、2014年／『カラー版西洋建築様式史』（共著）美術出版社、1995年／『明治のお雇い建築家エンテ&ベックマン』井上書院、1989年
- 松田 忍（まつだしのぶ）准教授・博士（文学）「一九六〇年代における日本被団協「再生」の意味を問う—「被団協関連文書」No.8の分析—」学苑947、2019年／「日本における「生活国家」論の潮流とその展開：1930年代～1950年代」社会経済史学83(4)、2018年／『ブックレット 近代文化研究叢書11 雑誌『生活』の六〇年—佐藤新興生活館から日本生活協会へ—』昭和女子大学近代文化研究所、2015年／『系統農会と近代日本：一九〇〇～一九四三年』勁草書房、2012年／『新生活運動と日本の戦後：敗戦から1970年代』（共著）日本経済評論社、2012年
- 山田 夏樹（やまだ なつき）専任講師・博士（文学）『ブックレット 近代文化研究叢書14 「ドヤ街」から読む「あしたのジョー」』昭和女子大学近代文化研究所、2020年（10月30日刊行予定）／「三島由紀夫「橋づくし」の批評性—差別と模倣」物語研究20、2020年／「三島由紀夫「白蟻の巣」、北杜夫「輝ける碧き空の下で」、手塚治虫「グリゴ」における勝ち組表象の現在性—ブラジル日系移民とグローバリズム」日本文学誌要98、2018年／『石ノ森章太郎論』青弓社、2016年／『ロボットと〈日本〉—近現代文学、戦後マンガにおける人工的身体の表象分析』立教大学出版会、2013年